

愛鷹・箱根山麓における後期旧石器時代後半期前葉の石器群 —編年及び年代の整理—

中 村 雄 紀

要旨 愛鷹・箱根山麓における後期旧石器時代後半期前葉（AT降灰期以降、砂川期以前、愛鷹・箱根第3期に相当）の石器群の変遷を、近年増加が著しい新出資料を組み込んで整理した。当該期の石器群を大別7群に分け、その上で南関東の編年、及び年代測定データとの対応関係を考察した。第I黒色帯から第Iスコリア層までが南関東V層下部段階からV層上部段階に相当し、休場層直下黒色帯から休場層下位がIV層下部段階からIV層中部段階に相当するという対応関係が認められ、前者の年代が約30000-28000 cal BPとなる一方、砂川期の年代が23000 cal BP頃で与えられるところから、IV層下部段階からIV層中部段階並行期が相対的に長期間に及んでいた可能性を指摘した。

キーワード：愛鷹・箱根山麓、後期旧石器時代後半期前葉、第I黒色帯、第Iスコリア層、休場層直下黒色帯、休場層下位、IV層下部・V層段階、放射性炭素年代

1. はじめに

静岡県東部地域では、最近数年間で愛鷹山麓をはじめとする第二東名関連調査遺跡の報告書刊行が進み、利用可能となった旧石器時代の遺跡のデータが大幅に増加している。愛鷹山麓では後期旧石器時代でも前半期の石器群が注目される傾向にあるが、それ以上に後半期の石器群の資料の増加は著しい。当該時期の重層遺跡が多く、また放射性炭素年代測定や黒曜石の原産地推定分析など、石器群の基本的なデータの充実が図られている。

一方で、当地域における一般的な編年観は1995・1996年の「愛鷹・箱根山麓の旧石器時代編年」（静岡県考古学会1995・1996）（以下、愛鷹・箱根編年、その中の特定の期に言及する場合は愛鷹・箱根○期と略す）から大きく変化しない状況が続いている。出土層位の対比から位置づけられた大別時期については大きく変化することはないが、現在のデータは石器群の変遷や内容についてかつてより詳細に迫ることを可能としている。本稿では、当地域における後期旧石器時代後半期前葉（AT降灰期以降から砂川並行期以前、愛鷹・箱根編年で言うところの第3期に相当）の変遷を、新出資料を取り入れ、年代測定の成果と対比した形で整理する。

2. 後期旧石器時代後半期前葉の編年研究

愛鷹・箱根山麓における後期旧石器時代後半期前葉は愛鷹・箱根第3期としてまとめられてきた。これについては1995年以降いくらかの修正が行われている（ 笹原千2004、 笹原芳2005、 高尾2006）ものの大枠では現在も受け入れられている。愛鷹・箱根第3期は南関東地方のIV層下部・V層段階に並行するものと考えられており、南関東地方との対比する形での整理も行われてきた（伊藤1996、須藤1996）。最近では全国的な編年対比の中での位置づけも提示されている（森先2007・2010）。筆者も愛鷹・箱根山麓のこの時期の石器群について述べたことがあるが（中村2005・2006・2009）、資料の増加に伴い修正の必要がある点も出てきているので本稿で現在の見解を提示する。

ところで、南関東地方の当該期の編年の問題点について伊藤健氏（2007）がまとめているが、その中の幾つかは静岡県東部地域にも当て嵌まる。まず文化層については、文化層の設定に関する問題もさることながら、1遺跡（厳密には調査区）で1文化層とされた資料が短絡的に1単位として扱われることも問題である。遺跡の範囲は行政的に定められたものにすぎないため、単に同一遺跡内というだけでは資料の一括性は担保されない。それ以上の層位的分離が不可能なため同一文化層に整理されていても、無批判

に数10~100m離れた遺構同士を1まとめに扱ったり、単独出土資料まで一緒にして石器組成を論じたりするのは厳密性を欠く議論である。また、同一時期の遺物群を自然層位で分断している可能性が高い事例も散見される。このように編年の単位となる個別石器群の検証が必要である点は関東地方と同様である。

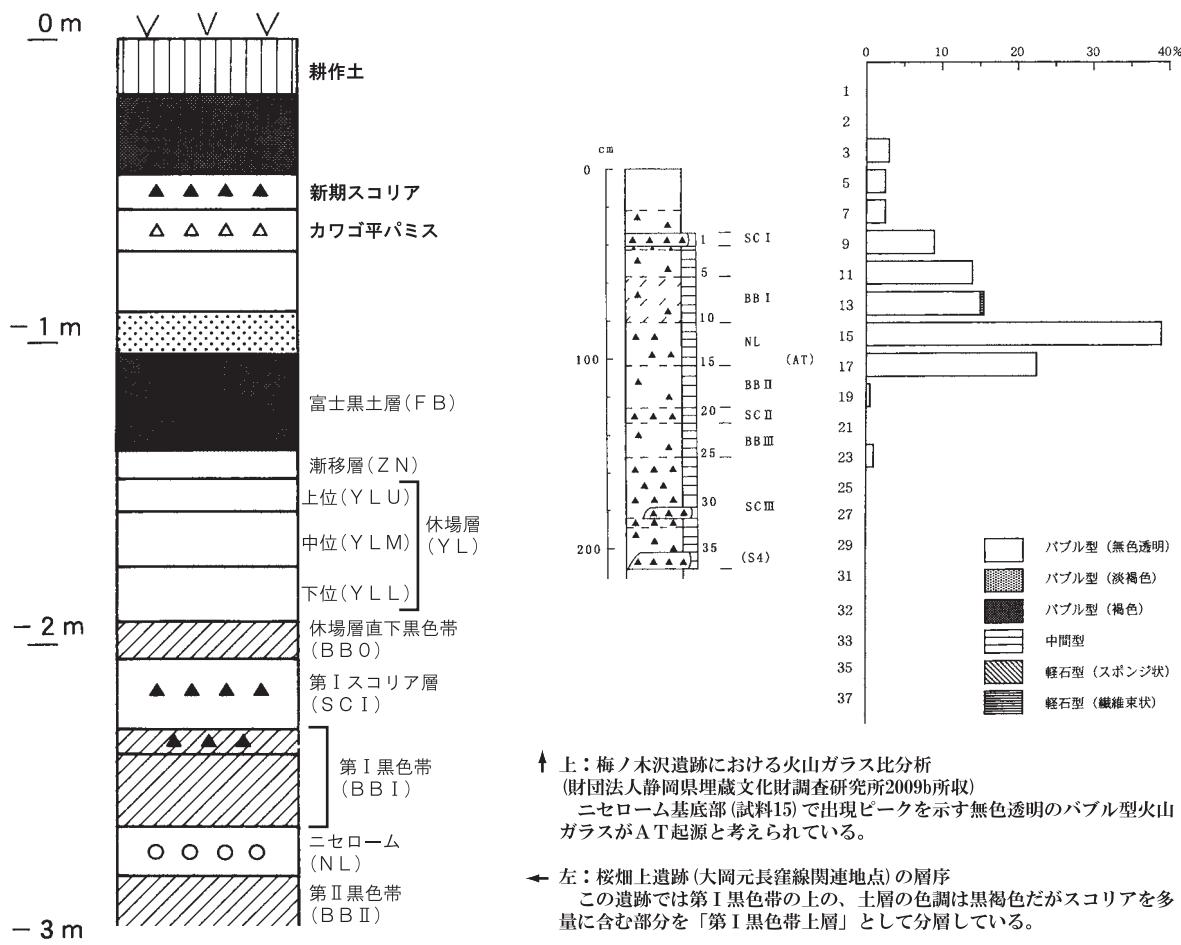
また、砂川期の直前にあたる愛鷹・箱根山麓の第3期終末、南関東のIV中亜段階（伊藤1991）、或いはIV層下部・V層最新段階（国武2003）に並行する時期の位置づけも見直すべき点である。1995・1996年の愛鷹・箱根編年では第3期を休場層直下黒色帯まで、第4期を休場層下部から、と位置付けていたが、その後休場層出土の石器群に第3期終末に位置づけられるものがあることが明らかになってきている。この点について明瞭な形で問題提起されたのは寺林遺跡（笛原千2004）においてである。寺林遺跡第III文化層の石器群は主として休場層下・中部から出土しているが、第4期よりむしろ第3期に近い特徴をもち、両者

の過渡期として位置づけられた。同様に、従来第4期、砂川並行期以降に位置づけられていた休場層出土の石器群には第3期の終末として再評価が必要なものが含まれている。

本稿ではこうした事項に留意して編年の整理を行う。

3. 遺跡と層位

まず、当地域の遺跡の層序について確認しておく（第1図）。火山ガラス等を対象としたテフラ分析によると、愛鷹・箱根山麓ではATの降灰層準はニセローム下部に位置づけられている。後期旧石器時代後半期前葉に相当する石器群は主として第I黒色帯から第Iスコリア層、休場層直下黒色帯、休場層下位にかけて出土する。これについては愛鷹山南麓から箱根西麓の広い範囲で同様の層序堆積が確認されている。但し細部では遺跡間で分層基準が一致していない可能性があるので層序の対比を検討する際には注意が必要である。例えば休場層の3分割については休場層内



第1図 愛鷹山麓における遺跡の層序

のスコリア層が確認されない場合や休場層と休場層直下黒色帯が分離されない場合があり、また第Ⅰスコリア層・第Ⅰ黒色帯についても、中間に黒褐色でスコリアが多い層が分けられる場合があるが、この部分を第Ⅰスコリア層・第Ⅰ黒色帯のいずれに含めるか、取り扱いが遺跡によって異なっている（第1図左）。

4. 石器群の変遷

（1）検討の方法

既存の編年において行われているように、当地域では（第Ⅰ黒色帯と休場層直下黒色帯とで区分するなど）出土層位に基づいて整理を行えば石器群の変遷はある程度まで捉えることが可能であるが、出土層位を現在以上に詳細に対比するのは容易ではない。また、石器群の変化は本来ある程度連続的であり、ある時点で全体が置き換わるというものではないはずである。そのため、ここでは層位に基づいて時間軸を輪切りにするのではなく、技術形態学的特徴と出土層位との双方を考慮して、第Ⅰ黒色帯から休場層下位の石器群をA群からG群の大別7群に分類した上で石器群の変遷を考察する。

（2）AT降灰直前からAT降灰期（第2図）

第Ⅱ黒色帯からニセロームの石器群では、大形の石刃・剥片製ナイフ形石器を特徴とする石器群と小形の剥片製ナイフ形石器を特徴とする石器群とがあることが知られている。石材はホルンフェルスや黒曜石を主とするが、同時期の南関東のように信州産黒曜石中心の遺跡が主体となる現象は認められない。

大形の基部加工尖頭形石刃石器を特徴とする西洞遺跡b区BBⅡU（沼津市教育委員会1999）のような石器群もあるが、清水柳北遺跡東尾根NL（1～5）（沼津市教育委員会1989）、イタドリA遺跡第Ⅰ文化層（6～8）（財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所2009d）など、5cm以下の小形のナイフ形石器を主体とする石器群が一般的である。清水柳北遺跡東尾根NL下部の石器群では、2cm程度の小形のナイフ形石器に、ホルンフェルス製の大形粗製石刃が伴っている。

（3）A群（第3図）

子ノ神遺跡第Ⅱ文化層（1～5）（沼津市教育委員会1982）、桜畠上遺跡（第二東名）第Ⅴ文化層（6～8）（財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所2009c）、陣場上B遺

跡第Ⅱ文化層（9～14）（長泉町教育委員会1994）など、第Ⅰ黒色帯下部の石器群である。層位的にはAT降灰期に後続する時期に位置づけられる。いずれも小形の石刃・縦長剥片製ナイフ形石器、搔器、楔形石器を主体とする石器群である。石刃・縦長剥片製石器については清水柳北遺跡東尾根NLなどと同様であるが、一般的剥片による搔器や楔形石器を伴う点が異なっている。ホルンフェルス製の大形石刃は桜畠上遺跡で出土しているが、刺突具に用いられる例は見られない。石材は子ノ神遺跡第Ⅱ文化層が柏崎産黒曜石、桜畠上遺跡（第二東名）第Ⅴ文化層が信州産黒曜石と、1種に偏る傾向がある。

この他、清水柳北東尾根BBⅠ下部の石器群（1～6号ブロック、配石など）の石器群も同様の特徴をもち、黒曜石製の小形のナイフ形石器、搔器にホルンフェルス製石刃を伴う。また、西山遺跡第Ⅱ文化層（石器集中部分）（財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所2006）は定型的石器が搔器のみの石器群であるが、出土層位から上記の石器群と同時期と考えられる。

（4）B群（第4図）

A群に比して大形・厚手の石刃・剥片を素材とする刺突具・加工工具が主体となる石器群をB群としてまとめ、以下のようにB1群とB2群とに細分する。

B1群は先細りの石刃を素材とする基部加工尖頭形石器（主としてホルンフェルス製）と厚手剥片製の搔器（主として信州や箱根産の黒曜石製）などから成る石器組成が一般的で、桜畠上遺跡（県道大岡元長窪線関連）BBⅠ（1～3）（財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所2003a）、中見代第Ⅱ遺跡第Ⅶ層（4～6）（沼津市教育委員会1989a）、中村分遺跡BBⅠ（三島市教育委員会1998）などがある。

B2群はこれに加えて、尖頭形の角錐状石器や、その加工技術の影響を受けたと考えられる厚形鋸歯縁加工による背部調整のナイフ形石器が伴うものである。上ノ池遺跡第Ⅲ文化層（7～12）（財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所1998）、イラウネ遺跡第Ⅲ文化層（4・5号ブロック）（18～22）（長泉町教育委員会1986）、中見代第Ⅲ遺跡第Ⅵ層（沼津市教育委員会1989a）などである。また、桜畠上遺跡（東駿河湾環状道路関連）第Ⅱ文化層エリアE（13～17）（財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所2010b）の石器群では基部加工が鋸歯状調整となるナイフ形石器が出土しており、B2群に位置づけられる可能性がある。尾上イ

ラウネ北遺跡BB I（沼津市教育委員会1992）のナイフ形石器も欠損品ではあるが類品の可能性がある。角錐状石器は出土例が僅かであり、上ノ池遺跡の他、零細な資料だが観音洞G遺跡BB I（三島市教育委員会1994）の例が挙げられる。また、八田原遺跡BB I（財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所1997）、加茂ノ洞B遺跡BB I（財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所1996）などのように大形石刃と厚形搔器とから成る石器群もB群に含まれるものと考えられる。

なお、桜畠上遺跡（県道大岡元長窪線関連）BB Iでもホルンフェルス製の角錐状石器様の石器1点が出土している（第4図2）。これは右側縁基部側と左側縁とを急斜度の鋸歯縁加工で成形し、右側縁上半はやや平坦な剥離で成形されたもので、先端は尖らないが折損している可能性がある。加工技術には角錐状石器からの影響が伺えるが、角錐状石器そのものとは言い難い形態である。

B群においては、黒曜石製搔器の素材をはじめとする一般的剥片製作に関しては関連する接合資料や石核が遺跡内ではしばしば出土するが、石刃（主にホルンフェルス製）に関しては遺跡内で石核や接合資料の例に乏しく、製作を示す資料がほとんど出土しない傾向にある。

出土層位は第I 黒色帶中部～上部である。桜畠上遺跡の資料から、県道大岡元長窪線関連地点BB I や東駿河湾環状道路関連地点第II文化層は出土層位、及び炭素年代からA群の第二東名関連地点第V文化層より後出と見られる。

（5）C群（第5図）

梅ノ木沢遺跡第VI文化層（1～6）（財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所2009b）、イラウネ遺跡第III文化層（1～3号ブロック）（7～11）、桜畠上遺跡（東駿河湾環状道路関連）第II文化層エリアB（12～14）がある。

縦長剥片素材の基部・一側縁加工ナイフ形石器、基部加工尖頭形剥片石器、素材を横位に用いた切出形石器など、一般的剥片主体の石器群である。厚形の剥片素材である搔器類と粗製の大形石刃がこれに伴う。

出土層位は、梅ノ木沢遺跡第VI文化層、桜畠上遺跡（東駿河湾環状道路関連）第II文化層エリアBは第I 黒色帶上部出土とされるが、イラウネ遺跡第III文化層（1～3号ブロック）については第I 黒色帶出土という以上の情報がない。

（6）D群（第6図）

中見代第I 遺跡第II文化層（1～5）（沼津市教育委員会1989b）、西大曲遺跡BB I（6～10）（沼津市史編さん委員会2002）など、石刃・縦長剥片製の二側縁加工・一侧縁加工ナイフ形石器を主体とする石器群。ナイフ形石器素材より一回り大きい大形石刃が伴い、西大曲遺跡では大形の石刃製削器も出土している。この他、小形の剥片・石刃石器群としては清水柳北遺跡東尾根BB I 上部（6～8号ブロック）があり、黒曜石製の小形ナイフ形石器とホルンフェルス製石刃とから成る。

出土層位は第I 黒色帶上面から第I スコリア層に包含されていたとされる。

（7）E群（第7図）

両側縁を急斜度鋸歯状加工で成形した角錐状石器、或いは片側縁を急斜度鋸歯状加工で成形したナイフ形石器など尖頭形の角錐状石器類と、切出形石器が発達する石器群をここに含める。

角錐状石器類は子ノ神遺跡第III文化層（1～7）、上ノ池遺跡第II文化層（8～10）、野台南遺跡第IV文化層（11～13）（財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所2009a）、桜畠上遺跡（第二東名）第VI文化層（20～22）、中見代第II遺跡第V層で出土しており、桜畠上遺跡、野台南遺跡、中見代第II遺跡でホルンフェルス製、子ノ神遺跡で信州産黒曜石製、上ノ池遺跡で信州産・柏崎産黒曜石である。中見代第II遺跡、子ノ神遺跡や上ノ池遺跡では厚い側縁加工による小形の切出形石器が伴う。

一方、梅ノ木沢遺跡第VII文化層（14～19）では、厚手の縦長剥片の両側縁を加工した大形の切出形石器があり、中見代第III遺跡第VI層でも同形態のもの（23）が出土している。

出土層位では桜畠上遺跡（第二東名）第VI文化層がやや下位に位置づけられ、第I 黒色帶上部から第I スコリア層で出土している。その他の石器群は第I スコリア層上部から休場層直下黒色帶に位置づけられており、層位的には近接した位置づけが与えられる。角錐状石器は第I 黒色帶中の遺跡で散見されていたが、この時期に集中的に現れる。

（8）F群（第9図）

角錐状石器に代わって急斜度加工をもつ砲弾形のナイフ形石器が現れ、これに各種のナイフ形石器、切出形石器が伴う1群である。砲弾形のナイフ形石器のある石器群とし

ては西大曲遺跡休場層Dブロック（1～4）の石器群が早くから知られていたが、下ノ大窪遺跡第III文化層（5～10）（財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所2008a）、秋葉林遺跡第VII文化層石器集中14-16（13～21）（財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所2009c）、梅ノ木沢遺跡第VIII文化層などに見られるものは同種の石器として位置づけられる。これらの石器群では、砲弾形ナイフ形石器は厚手で縦長の素材を縦位に用いるが、これに対し薄手の縦長剥片製の一側縁・二側縁加工ナイフ形石器もある。また、幅広の素材を横或いは斜位に用いた切出形石器があるが、これにも厚形、薄形両様が見られる。

また、同様の層位から出土している基部・先端加工のナイフ形石器や一側縁加工のナイフ形石器のみから成る池田B遺跡（11・12）（財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所2000）、桜畠上遺跡（東駿河湾環状道路関連）第III文化層エリアA、同エリアBもこの1群に含めておく。

出土層位は休場層直下黒色帶上部から休場層の最下部を中心とする。

（9）G群（第10図）

F群に層位的に後続する、主として休場層下位から出土する石器群を一括する。石器群が主に休場層中位から下位に包含され、礫群が休場層下位から中位の下底部に位置づけられる1群として抽出されるが、石器群の技術形態学的特徴ではF群と共通する要素が多く見られる。

秋葉林遺跡（第5地区）第VIII文化層（1～6）、向田A遺跡YL4号ブロック（財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所2007）、中林山遺跡（20～23）（三島市教育委員会2002）では厚手の側縁加工をもつナイフ形石器、切出形石器が見られ、それに対し塚松遺跡第III文化層22号ブロック（16～19）（財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所2008b）、入ノ洞B遺跡第III文化層（財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所2008b）、清水柳北遺跡東尾根休場層10ブロック群、桜畠上遺跡（東駿河湾環状道路関連）第IV文化層エリアJなどでは薄手の二側縁・一側縁加工ナイフ形石器、切出形石器が主体である。寺林遺跡第III文化層（7～15）（財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所2003b）では遺物集中ごとにこれらの様々な要素が入っている（註1）。

なお、かつては休場層下位からが「愛鷹・箱根第4期」として設定され、砂川並行期の石器群が出土すると見なさ

れていたが、ここに見たように休場層下位では基本的に砂川期より遡る石器群が出土し、砂川並行期の石器群の出土層位は主に休場層中位となる（中村2006）。

5. 編年の整理と対比

第I 黒色帶から休場層下部までの石器群を仮にA～Gの7群にまとめたが、ここでこれらの時間的な前後関係を整理し、また南関東の編年との並行関係を整理する（註2）。

すでに述べた通り、この時期の石器群は南関東においてIV層下部・V層段階（註3）と呼ばれてきた時期に相当し、地域間の対比も実践されてきた。IV層下部・V層段階は伊藤健氏の論考（1991）以来4つの時期に分けて理解されることが一般的である。

A群はAT降灰期のVI層段階から連続的な様相をもち、V層下部段階とされる湘南藤沢キャンパス構内遺跡第V文化層（第10図3～6）（慶應義塾1992）の石器群に対比される。また、小形剥片製ナイフ形石器を主体とする点では栗原中丸遺跡第VII文化層（同図1・2）（神奈川県埋蔵文化財センター1984a）が近い内容をもっている。

B群は石刃製基部加工尖頭形石器主体のB1群と鋸歯状調整のナイフ形石器が現れるB2群とに分けたが、石刃製基部加工尖頭形石器と鋸歯状調整ナイフ形石器とは共伴する場合もあり、両者の層位的差異は愛鷹・箱根山麓では明瞭ではない。南関東地方では石刃製の基部加工・側縁加工のナイフ形石器はV層下部段階（第10図）、鋸歯状調整によるナイフ形石器はV層上部段階（第11図）に主体となる。したがって、A群の主なもの、及びB1群がV層下部段階、B2群がV層上部段階に対比される。

C・D群は基部・側縁加工のナイフ形石器や基部加工尖頭形石器が主体となっている。V層上部段階には基部・側縁加工のナイフ形石器や基部加工尖頭形石器主体の石器群（第11図1～5）も見られることから（註4）、この段階に対比されるものと考えられる。

E群は、愛鷹山麓において角錐状石器が最も多くなるなど、IV層下部段階（第12図）に対比される。関東地方では長狭で大形の切出形石器が発達し、素材を横位に用いる例が多いのに対し、愛鷹山麓では縦位で同様の形態が実現されている（第7図18、23）。但し、E群の一部は層位的にも年代測定においてもC群とほぼ同時期に位置づけられ、時期的に重なる部分もあったようである。

第1表 愛鷹・箱根山麓の石器群の年代

遺跡	文化層	遺構	層位	測定番号	炭素年代(yrBP)	較正年代(cal BP)
向田A	YL	炉跡01内	YL	IAAA-60498	19250 ± 90	23010 — 23270
向田A	YL	炉跡01内	YL	IAAA-60499	19130 ± 100	22870 — 23170
向田A	YL	炉跡01 (RG06)	YLL	IAAA-10528	15550 ± 60	18670 — 18750
梅ノ木沢		炭化物集中007	YL 4	IAAA-80612	17910 ± 80	21370 — 21510
梅ノ木沢		炭化物集中012	YL 5	IAAA-80611	18950 ± 80	22690 — 22930
桜畠上 (第二東名)	VI	1号炭化物集中	BB I U	IAAA-80599	23420 ± 100	28090 — 28250
桜畠上 (第二東名)	VI	1号炭化物集中	BB I U	IAAA-80600	23600 ± 100	28190 — 28390
梅ノ木沢	VI	1号礫群	BB I	IAAA-80616	23460 ± 110	28100 — 28280
梅ノ木沢	VI	3号礫群	BB I	IAAA-80613	23620 ± 100	28200 — 28400
梅ノ木沢	VI	5号礫群	BB I	IAAA-80615	23450 ± 110	28100 — 28280
細尾	IV	BL22	BB I	PLD-13810	23396 ± 74	28080 — 28220
観音洞B		BB I 1号炉跡	BB I	N-5608	23700 ± 680	27810 — 29350
観音洞B		BB I 1号炉跡	BB I	N-5609	24400 ± 570	28570 — 29790
桜畠上 (東駿河湾)	II	エリアE	BB I	IAAA-90927	24180 ± 110	28730 — 29390
桜畠上 (東駿河湾)	II	エリアE	BB I	IAAA-90928	24190 ± 100	28760 — 29400
桜畠上 (東駿河湾)	II	エリアE	BB I	IAAA-90929	24340 ± 100	28990 — 29570
桜畠上 (県道)	BB I	RG05	BB I	PLD-1431	24610 ± 100	29560 — 29760
桜畠上 (県道)	BB I	RG05	BB I	PLD-1433	24540 ± 110	29460 — 29720
桜畠上 (県道)	BB I	RG05	BB I	PLD-1434	24320 ± 100	28950 — 29550
桜畠上 (第二東名)	V	10号炭化物集中	BB I L	IAAA-80594	24850 ± 100	29730 — 29890
桜畠上 (第二東名)	V	10号炭化物集中	BB I L	IAAA-80595	24900 ± 110	29760 — 29940
桜畠上 (第二東名)	V	7号炭化物集中	BB I L	IAAA-80596	24930 ± 110	29770 — 29970
桜畠上 (第二東名)	V	7号炭化物集中	BB I L	IAAA-80597	24990 ± 110	29810 — 30030
桜畠上 (第二東名)	V	8号炭化物集中	BB I L	IAAA-80598	25010 ± 110	29820 — 30040
桜畠上 (第二東名)	V	3号炭化物集中	BB I L	IAAA-80601	25090 ± 110	29860 — 30120
西山	II	1号炭化物集中	NLa	IAAA-41163	25110 ± 120	29870 — 30150
西山	II	1号炭化物集中	NLa	IAAA-41164	25230 ± 130	29940 — 30240
西山	II	1号炭化物集中	NLa	IAAA-41165	24960 ± 130	29790 — 30010
西山	II	1号炭化物集中	NLa	IAAA-41166	24820 ± 130	29700 — 29900
西山	II	2号炭化物集中	BB I L	IAAA-41167	25150 ± 130	29900 — 30180
西山	II	2号炭化物集中	BB I L	IAAA-41168	25160 ± 130	29900 — 30200
向田A	NL	炭化物集中域03	NL	IAAA-60494	25420 ± 120	30060 — 30400
向田A	NL	炭化物集中域03	NL	IAAA-60495	25390 ± 110	30050 — 30370
向田A	NL	炭化物集中域03	NL	IAAA-60496	25160 ± 120	29900 — 30180
向田A	NL	炭化物集中域03	NL	IAAA-60497	25370 ± 120	30020 — 30360
向田A	NL	炭化物集中域05	NL	IAAA-60500	25170 ± 120	29910 — 30190
向田A	NL	炭化物集中域05	NL	IAAA-60501	25010 ± 120	29820 — 30060
向田A	NL	炭化物集中域07	NL	IAAA-60502	25690 ± 130	30330 — 30750
向田A	NL	炭化物集中域07	NL	IAAA-60503	24910 ± 110	29770 — 29950
向田A	NL	炭化物集中域07	NL	IAAA-60504	25180 ± 120	29920 — 30200
向田A	NL	炭化物集中域07	NL	IAAA-60505	25190 ± 110	29920 — 30200
向田A	NL	炭化物集中域06	NL	IAAA-60506	25440 ± 110	30080 — 30420
向田A	NL	炭化物集中域06	NL	IAAA-60508	25090 ± 120	29860 — 30120
向田A	NL	炭化物集中域06	NL	IAAA-60509	25430 ± 120	30070 — 30410
向田A	NL	炉跡03内	NL	IAAA-60510	25210 ± 110	29930 — 30210
向田A	NL	炭化物集中域04	NL	IAAA-60511	25100 ± 110	29870 — 30130
向田A	NL	炭化物集中域04	NL	IAAA-60512	24870 ± 110	29740 — 29920
向田A	NL	炭化物集中域04	NL	IAAA-60513	25080 ± 120	29860 — 30120
向田A	NL	第I 黒色帶	NL	IAAA-61099	24450 ± 140	29160 — 29660
向田A	NL	ニセローム層	NL	IAAA-61100	24840 ± 150	29700 — 29920
向田A	NL	炉跡02 (SU01)	NL	IAAA-10616	25630 ± 120	30260 — 30640
向田A	NL	炉跡02 (SU01)	NL	IAAA-10617	19550 ± 70	23360 — 23500
向田A	NL	ブロック13 (SU02)	NL	IAAA-10618	24760 ± 90	29680 — 29840
桜畠上 (県道)		SX05	NL	PLD-1435	25330 ± 110	30000 — 30320

第2表 相模野・武蔵野台地等の石器群の年代

遺跡	文化層	遺構	層位	測定番号	炭素年代(yrBP)	較正年代(cal BP)
福田丙二ノ区	II	2号礫群	B 1	Tka-11591	19440 ± 430	22840 — 23780
福田丙二ノ区	II	2号礫群	B 1	Tka-11598	18970 ± 440	22190 — 23250
福田丙二ノ区	II	4号礫群	B 1	Tka-11601	19240 ± 700	22180 — 23860
福田丙二ノ区	II	5号礫群	B 1	Tka-11602	18770 ± 330	22030 — 22990
福田丙二ノ区	II	7号ブロック隣接	B 1	Tka-11603	19220 ± 330	22730 — 23390
福田丙二ノ区	II	7号ブロック隣接	B 1	Tka-11605	19460 ± 350	22940 — 23700
福田丙二ノ区	II	1号礫群	B 1	Tka-11611	19300 ± 270	22850 — 23410
福田丙二ノ区	II	1号礫群	B 1	Tka-11537	19660 ± 440	23080 — 24120
宮ヶ瀬中原	V	P 1炉址	B 1 L	Beta-97116	18920 ± 100	22650 — 22930
宮ヶ瀬中原	V		B 1 L	Beta-97117	19240 ± 100	22990 — 23270
宮ヶ瀬中原	V		B 1 L	Beta-97118	19470 ± 100	23290 — 23450
用田大河内	VI	第7石器集中	BB 2 L②	Beta-125304	22880 ± 80	27660 — 27920
用田大河内	VI	第7石器集中	BB 2 L②	Beta-125305	21840 ± 120	25920 — 26480
用田大河内	VI	第7石器集中	BB 2 L②	Beta-125306	21330 ± 50	25160 — 25540
用田大河内	VI	第7石器集中	BB 2 L②	Beta-128829	22850 ± 180	27170 — 27910
用田大河内	VI	第7石器集中	BB 2 L②	Beta-130869	22790 ± 200	27120 — 27860
津久井城跡馬込地区	4	2号礫群	B 2 U	IAAA-81382	24570 ± 110	29500 — 29740
武蔵台		A98-SX29	Vb	PLD-9904	22100 ± 90	26260 — 26720
武蔵台	4	B91-SX19	Vb	PLD-9906	22440 ± 90	26920 — 27520
武蔵台西地区	4	A97-SX48 (炉跡状遺構)	Vb	Beta-182635	24150 ± 200	28640 — 29400
武蔵台西地区	4	A97-SX72 (炉跡状遺構)	Vb	Beta-156136	23940 ± 150	28470 — 29170
武蔵台西地区	4	A97-SX98 (炉跡状遺構)	Vb	Beta-182636	24530 ± 300	28860 — 29740

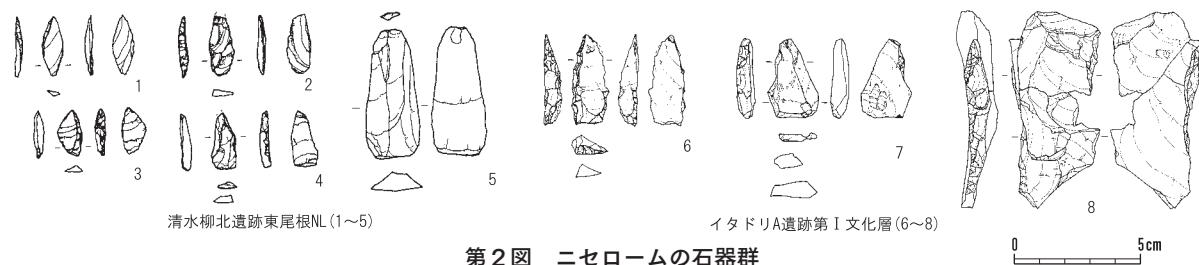
F群からG群は先述の通り連

続的に捉えられ、主要器種の型
式等では区分があまりはつきり
しない。まだ検討の余地がある
が、現段階では、F群は国武貞
克氏 (2003) によりIV層下部
段階の新相に位置づけられた一
群 (自由学園南遺跡 : 第12図
19~25など (自由学園南遺跡
調査団1991))、G群は代官山
遺跡第VI文化層 (第13図7~
10) (神奈川県埋蔵文化財セン
タ—1984b)、武蔵台遺跡IV中
(11~14) (都立府中病院内遺跡
調査団1984) などのIV層中部
段階 (第13図) とされる石器
群とそれぞれ対比されるものと
予測される。特に秋葉林遺跡第
5地区第VII文化層の石器群は明
花向遺跡C区 (第13図1~6)
(埼玉県埋蔵文化財調査事業団
1984)、花沢東遺跡第III文化層
(15~18) (恋ヶ窪遺跡調査会
1984) のものなどとよく類似
している。

6. 石器群の年代

最後に、前節まで扱った石
器群の変遷と年代測定により得
られた年代値との関係をまとめ
ておく。

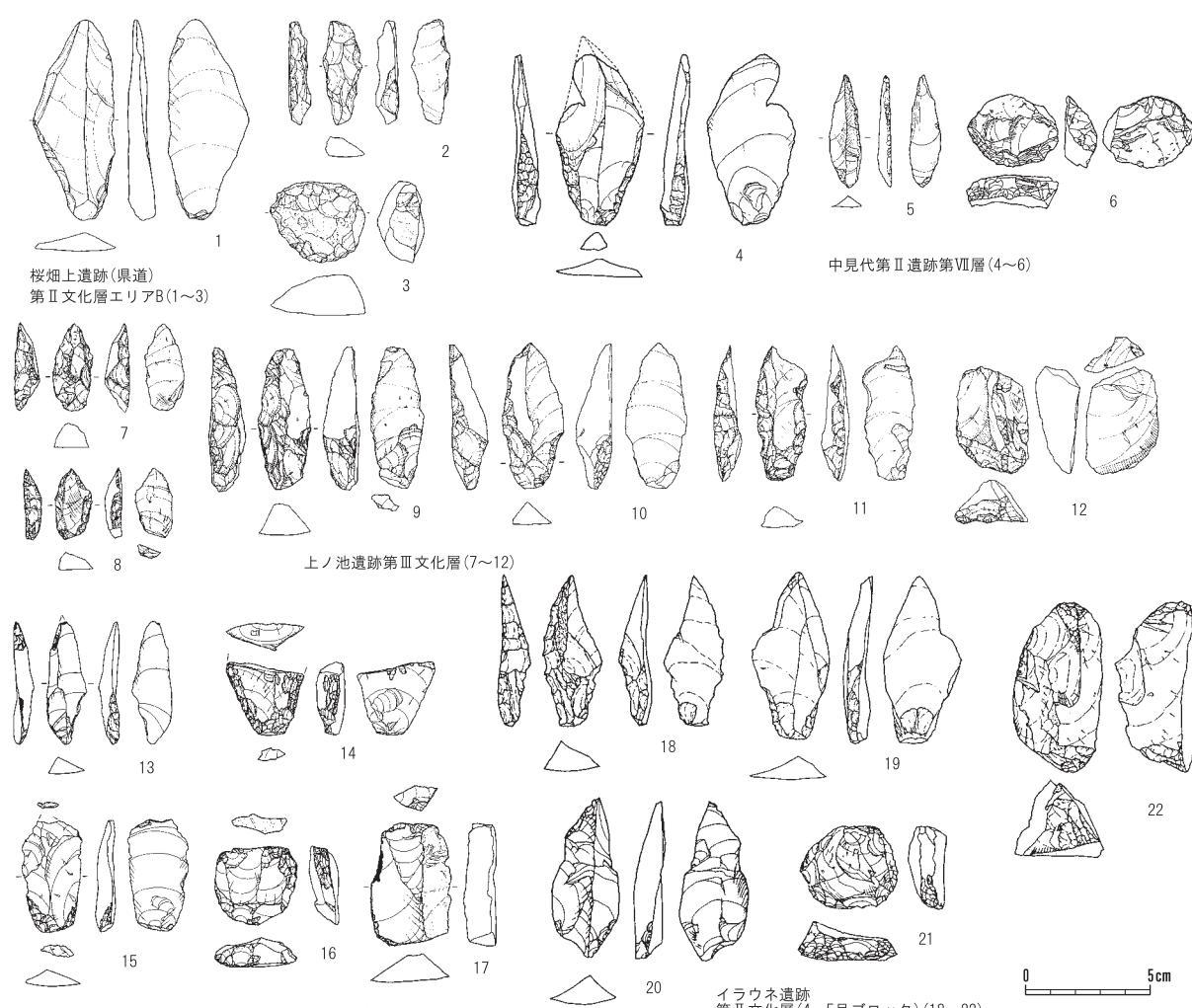
愛鷹山麓の旧石器時代の遺跡
ではしばしば炭化物集中が発見
される (礫群などと重複してい
る場合もあるが、まったく遺物
を伴わない場合もある)。主と
してそうした炭化物集中から得



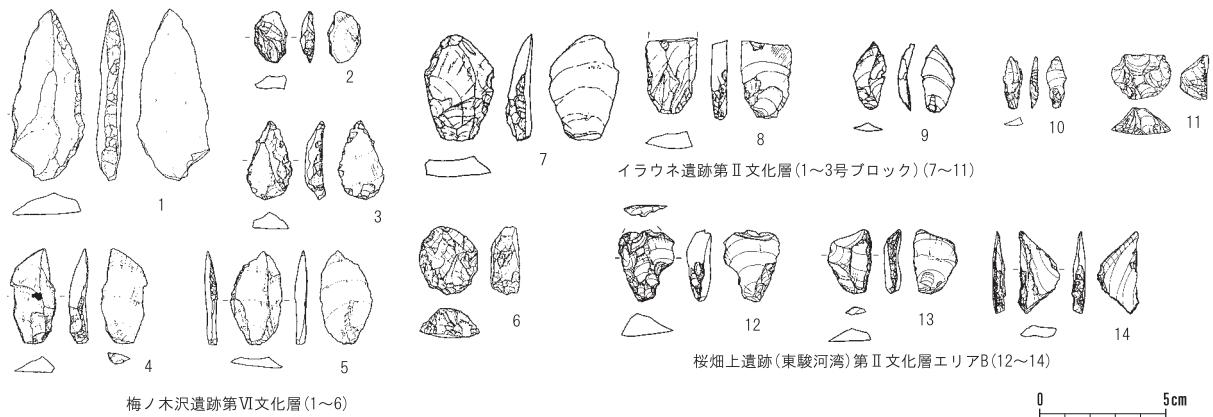
第2図 ニセロームの石器群



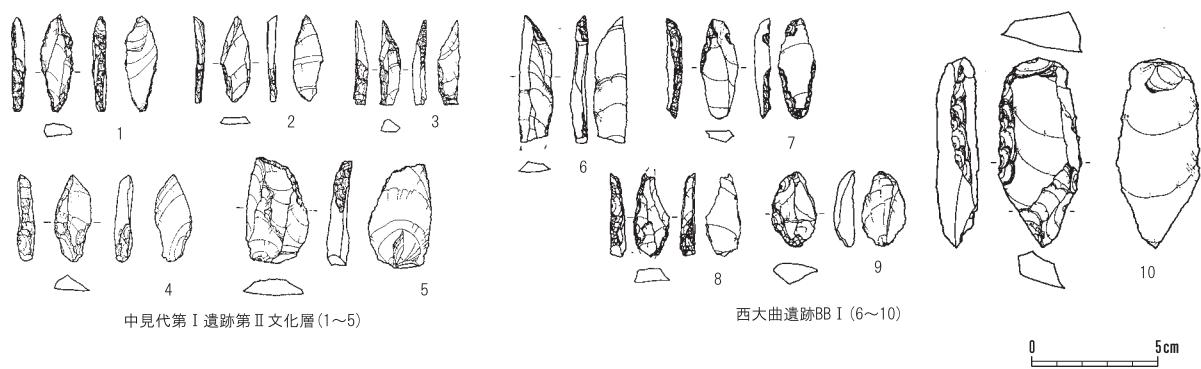
第3図 A群の石器群



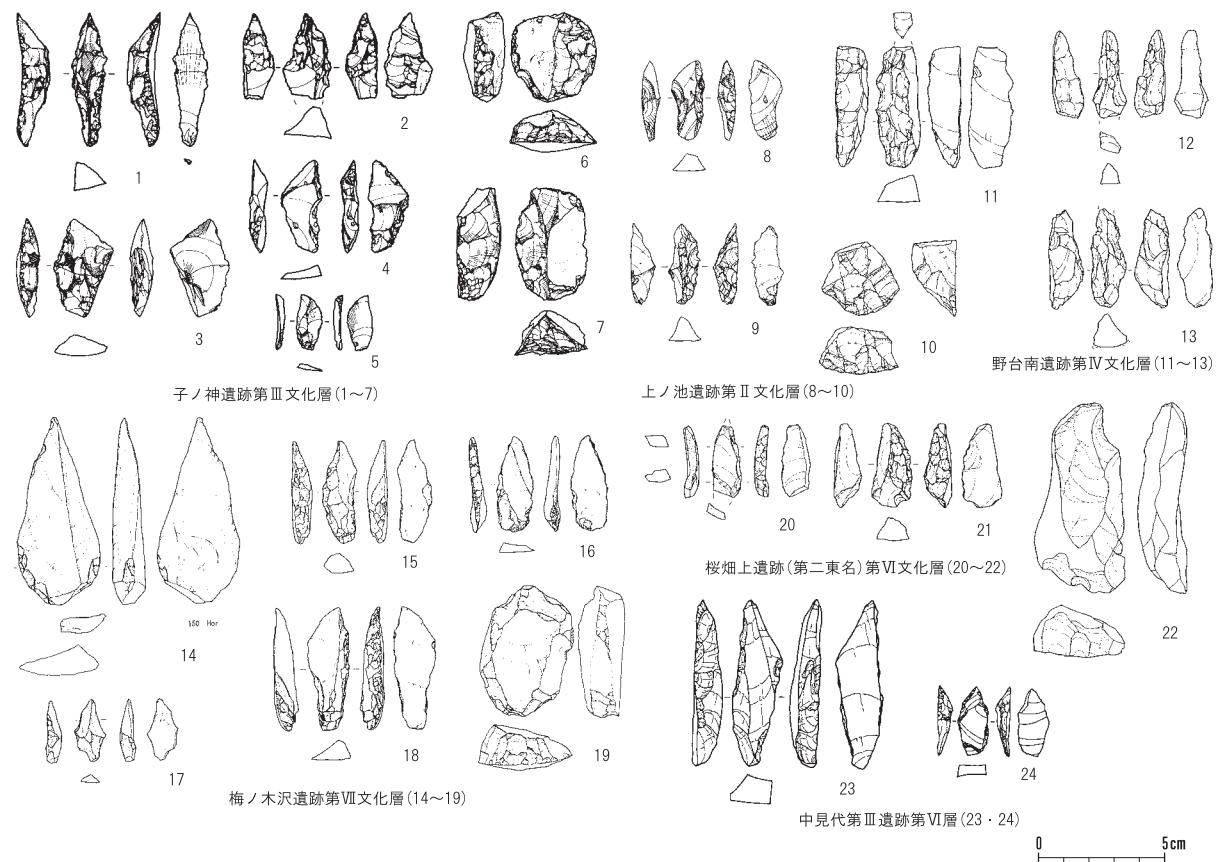
第4図 B群の石器群



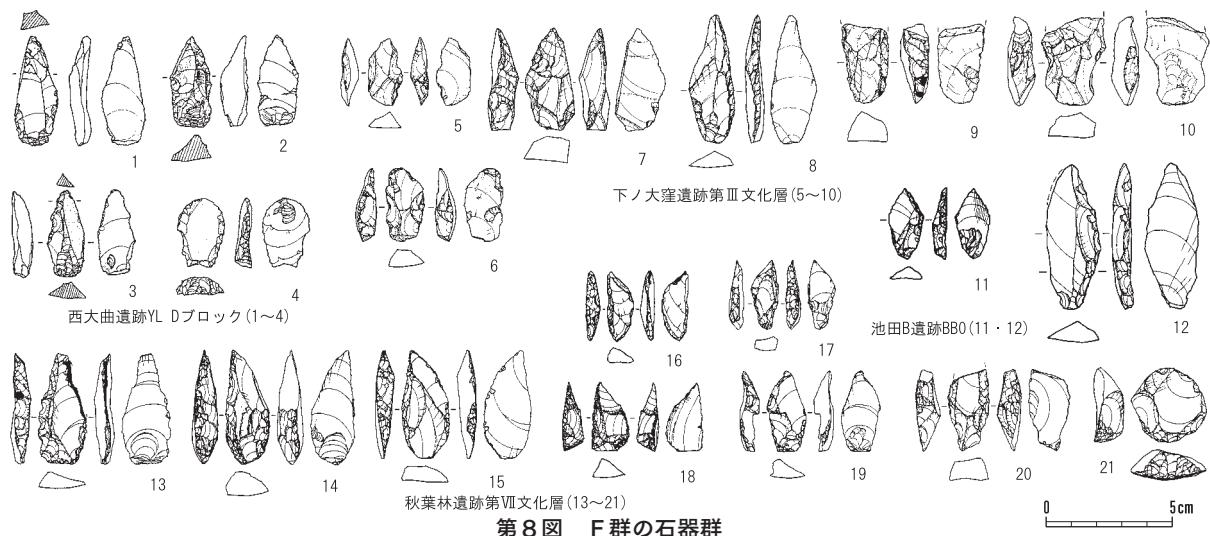
第5図 C群の石器群



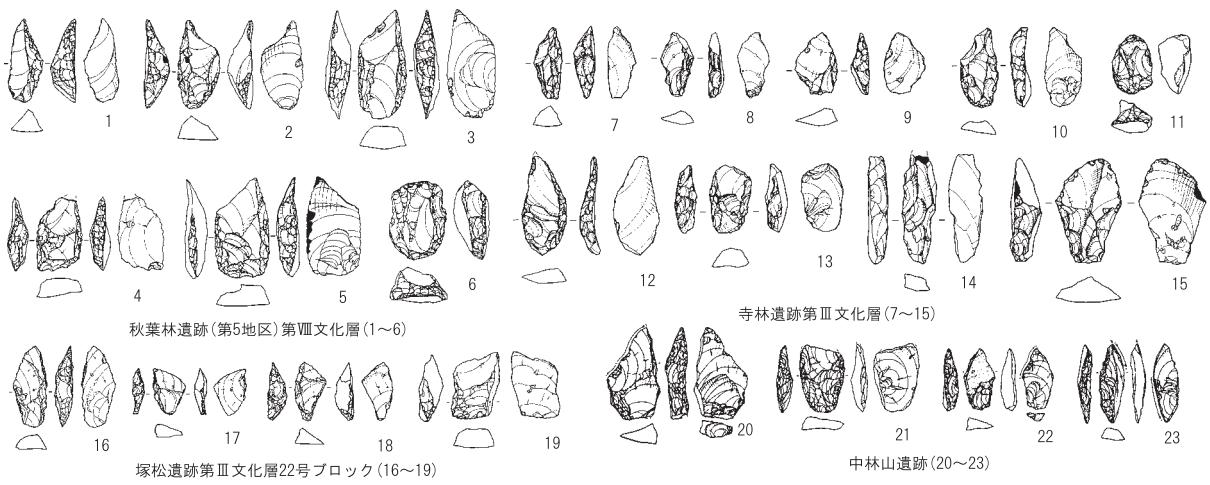
第6図 D群の石器群



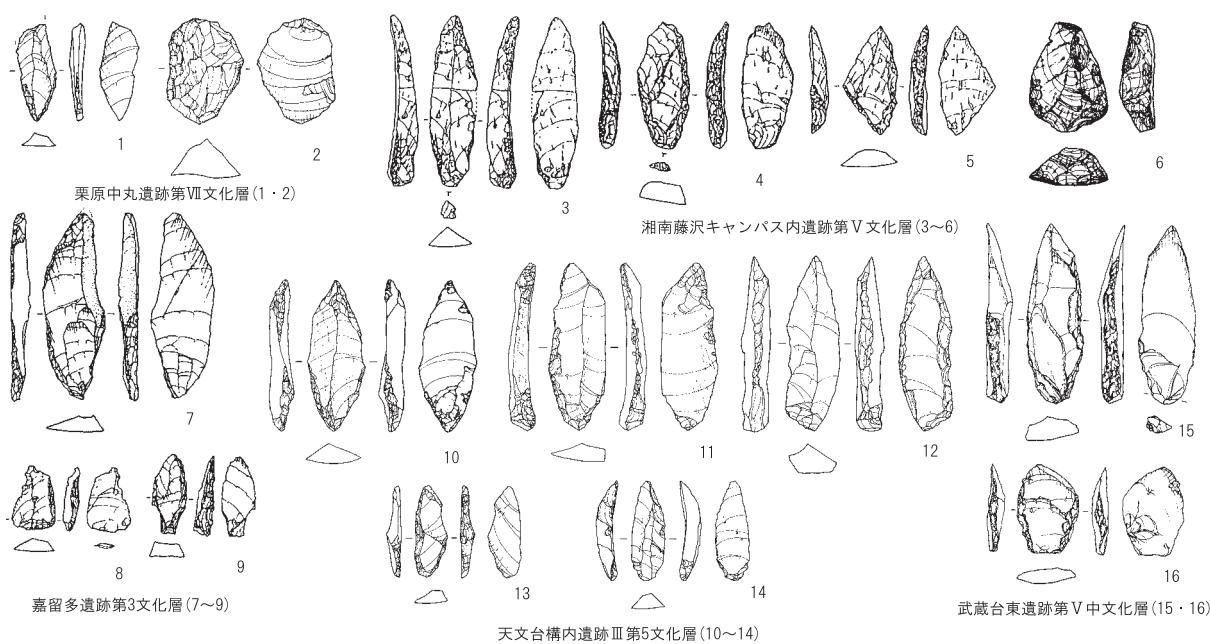
第7図 E群の石器群



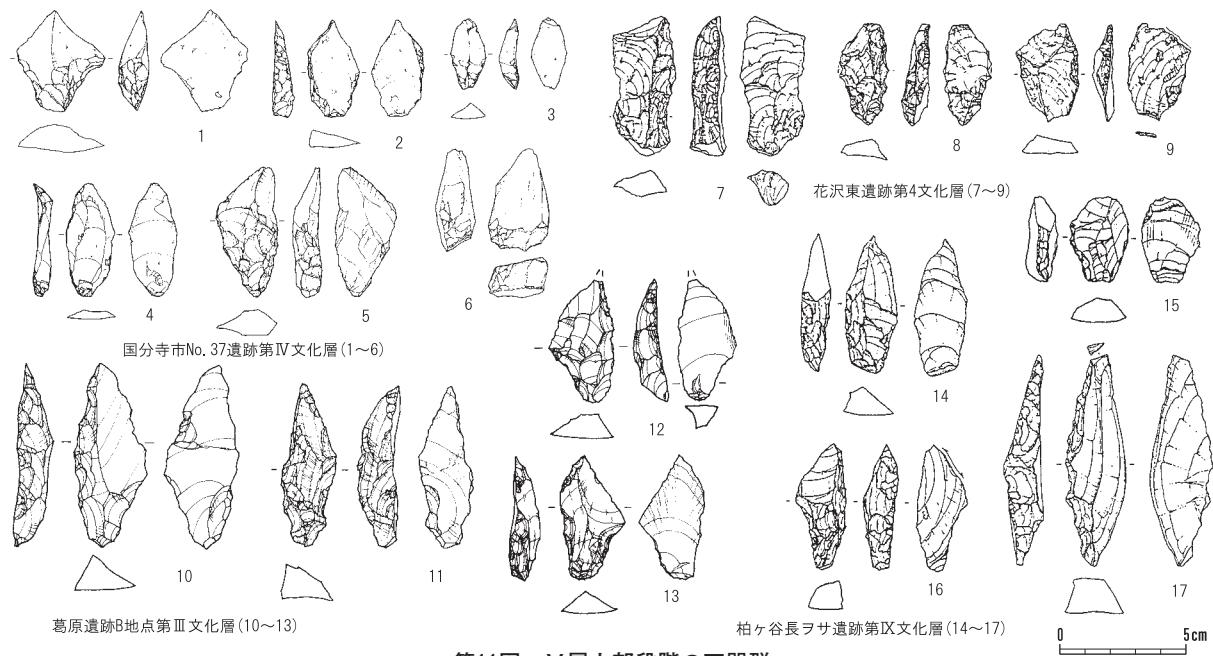
第8図 F群の石器群



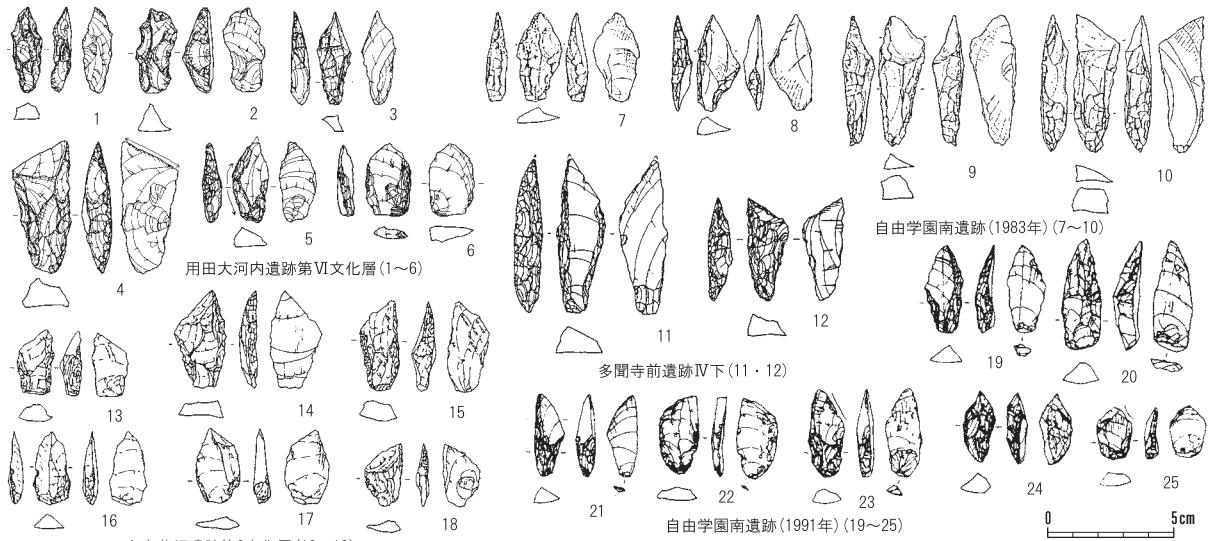
第9図 G群の石器群



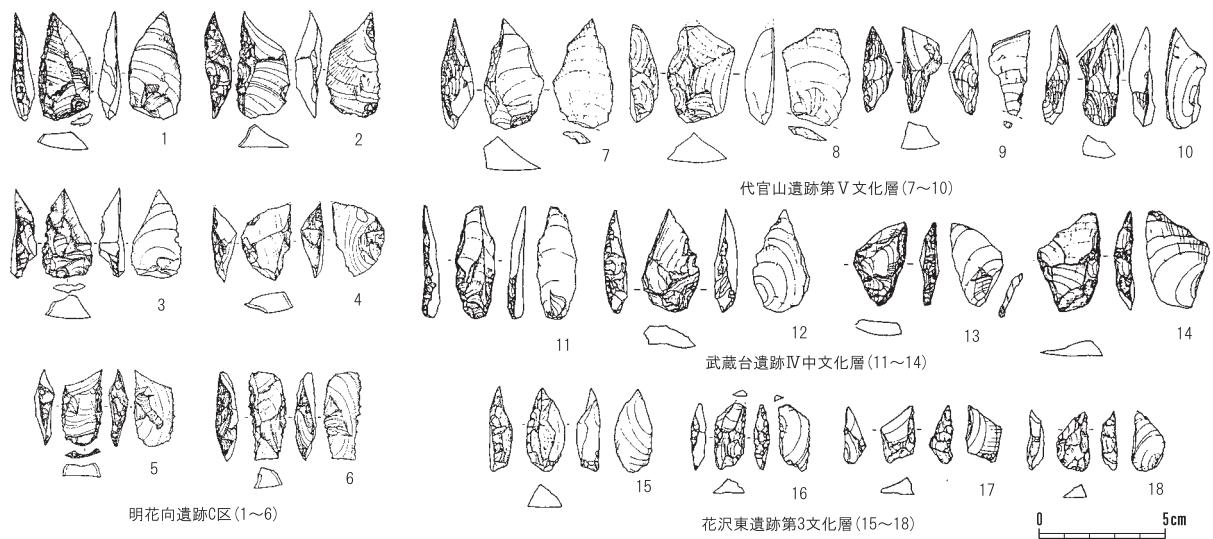
第10図 V層下部段階の石器群



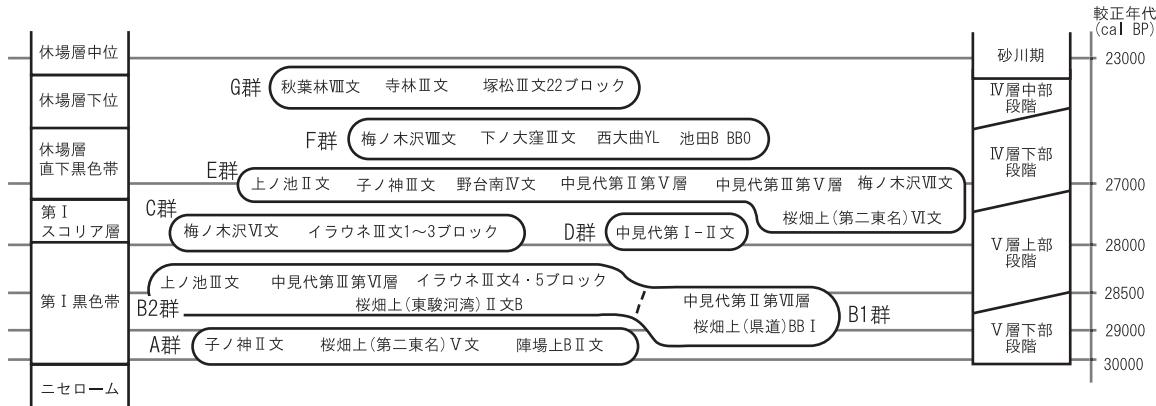
第11図 V層上部段階の石器群



第12図 IV層下部段階の石器群



第13図 IV層中部段階の石器群



第14図 石器群の変遷と年代の模式図

られた試料のAMS法による放射性炭素年代測定の事例が近年蓄積されつつあり、本稿の対象となる第I 黒色帯前後に関しても複数の遺跡でデータが得られている。旧石器時代の炭素年代のデータ集成は三好元樹氏（2010）によるものがあるが、その後報告された資料を追加し、CalPal2007-Hulu (Danzeglocke et al. 2007) による較正年代（誤差範囲は1標準偏差）とともに第1表に示した（ニセロームから砂川並行期前後の休場層までを含めた）。また合わせて、関連する時期の相模野台地、武藏野台地等の炭素年代を同様に第2表に示した（註5）。

愛鷹山麓の遺跡におけるニセロームについては約25000～25500 BPの年代が得られている。これは約24500～25000 BPとされるATの降灰年代に比して若干古い値であり、先述したテフラ分析の結果とやや整合しない点が残る（三好2010）点には注意が必要であるが、年代の前後関係は層位的関係と大きく矛盾しないため、ここではこの値に基づき整理を行う。

第I 黒色帯下部のA群では桜畠上遺跡（第二東名）第V文化層で29700-30100 cal BP前後の年代が得られている。また、西山遺跡でも同様の年代値が得られている。

これに後続する第I 黒色帯の石器群であるB 1群の桜畠上遺跡（県道大岡元長窪線関連）BB I では29000-29800 cal BP、B 2群の桜畠上遺跡（東駿河湾環状道路関連）第II文化層では約28700-29600 cal BPとなっている。但し後者はB 2群の典型例とは言い難く位置づけは確定的でない。なおV層上部に位置づけられる武藏台遺跡西地区第4文化層でも28400-29400 cal BPの測定結果がある。

第I 黒色帯上部～第I スコリア層の遺跡では梅ノ木沢遺跡第VI文化層（28100-28400 cal BP）、細尾遺跡第III文化

層（28100-28200 cal BP）、桜畠上遺跡（第二東名）第VI文化層（28100～28400 cal BP）とそれぞれ近い値が得られている。このうち桜畠上のみE群であるが、この石器群はE群の中では層位的に他より古く位置づけられることから、E群の多くはこれより新しい年代となる可能性が高い。

静岡県東部ではこれ以降休場層まで年代測定の報告例がなく、IV層下部、IV層中部にあたる年代値のデータが抜けている。南関東ではIV層下部段階の武藏台西地区第4文化層で26900-27500 cal BP、用田大河内遺跡第VI文化層で（値が分散しているが）25200-27900 cal BPといった値が得られている（註6）。

愛鷹山麓の砂川並行期の年代はデータが乏しいが向田A遺跡の炉跡01がこれに当たるものと考えられる。炉跡01は休場層下層上面で検出されたもので、砂川期に相当するブロック08の石器群が重複して分布する。年代は22900-23300 cal BPであり、これは相模野台地の砂川期石器群（福田丙二ノ区遺跡、宮ヶ瀬中原遺跡、宮ヶ瀬上原遺跡）の年代とほぼ一致するものである（註7）。

以上の年代値を前節でまとめた石器群の変遷と対比させると第14図右側のようになる。

7. 結 語

本稿では愛鷹山麓を中心とした層位的事例に基づき石器群の変遷を捉えた上で南関東地方の編年との対比、年代測定データとの対比を行った。その上で注意すべきこととして以下の点が挙げられる。

まず、当然予測されたことだが捉える事のできた編年上の区分が愛鷹・箱根山麓と南関東とでは必ずしも整合的ではない。V層下部段階とV層上部段階との区分は愛鷹・箱

根山麓では層位的には明瞭でない一方、IV層下部段階などは愛鷹・箱根山麓では層位的に細分される可能性がある。但し、検討対象となる資料数が関東地方に比べて限定的である点には留意しなければならない。

また、現時点では得られるデータを見る限りでは、第I黒色帯下部から第Iスコリア層に相当する年代幅が較正値・未較正値でほぼ同じ約2000年間であるのに対し、第Iスコリア層から砂川並行期の年代には未較正で約4000年、較正値で約5000年の開きがある。すなわち、V層下部～V層上部段階に比してIV層下部～IV層中部段階、砂川期に相当する時間幅が倍以上となることを示している。

今回はほとんど石器群の区分と年代の整理に終始してしまったが、石器群の系統や石材消費の観点からも整理しておく必要がある。今後の課題としつつ筆を置きたい。

註

1 筆者はかつて寺林遺跡第III文化層の石器群の尖頭器の共伴を積極的に捉えたことがあったが（中村2006）、他遺跡の出土事例等を勘案し現在では懐疑的に考えている。少なくとも漸移層出土の黒曜石製のものはこの文化層に編入する必然性は薄いと見られる。

2 筆者は愛鷹・箱根第3期を細分したことがあるが（中村2006・2009）、これは必ずしも南関東の4細分と対応させたものではない。

3 IV層下部・V層段階の4期区分は、細分時期の呼び方が論者によって特に統一されていないが、ここでは煩雑を避け、武藏野台地南部の層名に基づき古いほうから「V層下部段階」、「V層上部段階」、「IV層下部段階」、「IV層中部段階」と呼ぶこととする。

4 第11図1のような基部加工尖頭形石器はこの時期に広域的に見られる石器とされている（森先2007）。

5 第1・2表の年代測定データは以下の文献に所収のものである。

向田A遺跡：財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所2007、梅ノ木沢遺跡：同2009b、桜畠上遺跡（第二東名）：同2009c、細尾遺跡：同2010a、桜畠上遺跡（東駿河湾）：同2010b、桜畠上遺跡（県道）：同2003a、西山遺跡：同2006、観音洞B遺跡：三島市教育委員会1994、福田丙ニノ区遺跡：かながわ考古学財団1999、宮ヶ瀬中原遺跡：かながわ考古学財団1997a、宮ヶ瀬上原遺跡：かながわ考古学財団1997b、用田大河内遺跡：かながわ考古学財団2004、津久井城跡馬込地区：かながわ考古学財団2010、武藏台遺跡：東京都埋蔵文化財センター2010、武藏台西地区：東京都埋蔵文化財センター2004

6 この他、津久井城跡馬込地区第4文化層の年代測定データもあるが、出土層位、石器群の内容と比べて極端に古い値であるため検討対象から外した。

7 梅ノ木沢遺跡でも近い年代値のデータが得られている

が、炭化物と共に伴する石器群は未報告（執筆時）のため明らかではない。

引用・参考文献

《論文等》

- 伊藤 健 1991 「ナイフ形石器の形態と変遷」『東京都埋蔵文化財センター研究論集』X、81-107頁
伊藤 健 2007 「ナイフ形石器文化編年の形成過程：V層・IV層下部段階の解体へ向けて」『旧石器研究』第3号、111-126頁
国武貞克 2003 「両面調整石器群の由来：関東地方V層・IV層下部段階から砂川期にかけての石材消費戦略の連続性」『考古学』I、52-77頁
 笹原千賀子 2004 「愛鷹・箱根山麓第3期の石器群：第3期から第4期へ、寺林遺跡の編年位置」『財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所設立20周年記念論文集』73-86頁
 笹原芳郎 2005 「愛鷹・箱根旧石器時代編年の現状と課題」『地域と文化の考古学I』明治大学考古学研究室、91-106頁
 静岡県考古学会 1995 「愛鷹・箱根山麓の旧石器時代編年予稿集」静岡県考古学会シンポジウムIX
 静岡県考古学会 1996 「愛鷹・箱根山麓の旧石器時代編年収録集」静岡県考古学会シンポジウムIX
 須藤隆司 1996 「中部・東海・北陸地方におけるV・IV下層段階の石器群：列島内対比の視点から」『石器文化研究』5、451-464頁
 須藤隆司 2006 「中部地方の地域編年」『旧石器時代の地域編年研究』、同成社、103-140頁
 高尾好之 2006 「東海地方の編年」『旧石器時代の地域編年研究』、同成社、61-102頁
 中村雄紀 2005 「愛鷹・箱根山麓における「ナイフ形石器終末期」の遺跡群」『石器文化研究』12、121-146頁
 中村雄紀 2006 「後期旧石器時代後半期の居住形態の地域的様相：愛鷹・箱根第3期・第4期の遺跡群」『東京大学考古学研究室研究紀要』第20号、1-36頁
 中村雄紀 2009 「旧石器時代」『桜畠上遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第208集、271-274頁
 中村雄紀 2010 「まとめ」『桜畠上遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第232集、163-170頁
 三好元樹 2010 「愛鷹・箱根山麓の旧石器時代14C年代の集成と検討」『静岡県埋蔵文化財調査研究所研究紀要』第16号、1-8頁
 森先一貴 2007 「角錐状石器の広域展開と地域間変異：西南日本後期旧石器時代後半期初頭の構造変動論的研究」『旧石器研究』第3号、85-110頁
 森先一貴 2010 「旧石器社会の構造的変化と地域適応」六一書房
 Danzeglocke, Uwe, Bernhard Weninger, and Olaf Jöris, 2007, Online Radiocarbon Age Calibration: www.calpal-online.de.
- 《報告書》
- 柏ヶ谷長ヲサ遺跡調査団 1997 『柏ヶ谷長ヲサ』
神奈川県埋蔵文化財センター 1984a 『栗原中丸遺跡』神奈川県埋蔵文化財センター調査報告3

- 神奈川県埋蔵文化財センター 1984b 『代官山遺跡』神奈川県埋蔵文化財センター調査報告11
- かながわ考古学財団 1997a 『宮ヶ瀬遺跡群X』かながわ考古学財団調査報告10
- かながわ考古学財団 1997b 『宮ヶ瀬遺跡群X II』かながわ考古学財団調査報告18
- かながわ考古学財団 1999 『福田丙二ノ区遺跡』かながわ考古学財団調査報告68
- かながわ考古学財団 2004 『用田大河内遺跡』かながわ考古学財団調査報告167
- かながわ考古学財団 2010 『津久井城跡馬込地区』かながわ考古学財団調査報告249
- 慶應義塾 1992 『湘南藤沢キャンパス構内遺跡 第2巻』
- 恋ヶ窪遺跡調査会 1984 『花沢東遺跡』
- 国分寺市遺跡調査会 2003 『国分寺市No.37遺跡発掘調査概報II』
- 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1984 『明花向・明花上ノ台・井沼方馬堤・とうのこし』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第35集
- 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 1996 『加茂ノ洞B遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第71集
- 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 1997 『八田原遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第87集
- 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 1998 『上ノ池遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第99集
- 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 2000 『池田B遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第122集
- 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 2003a 『大岡元長窪線関連遺跡I』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第138集
- 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 2003b 『寺林遺跡・虎杖原古墳』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第142集
- 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 2006 『西山遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第170集
- 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 2007 『向田A遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第178集
- 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 2008a 『下ノ大窪遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第190集
- 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 2008b 『裾野市富沢・桃園の遺跡群』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第193集
- 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 2009a 『大岡元長窪線関連遺跡III』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第205集
- 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 2009b 『梅ノ木沢遺跡II』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第206集
- 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 2009c 『秋葉林遺跡I』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第207集
- 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 2009c 『桜畠上遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第208集
- 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 2009d 『イタドリA遺跡・イタドリB遺跡・イタドリC遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第211集
- 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 2010a 『細尾遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第222集
- 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 2010b 『桜畠上遺跡I』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第224集
- 自由学園南遺跡調査団 1983 『自由学園南遺跡』
- 自由学園南遺跡調査団 1991 『自由学園南遺跡』
- 世田谷区遺跡調査会 1982 『嘉留多遺跡・砧中学校7号墳』
- 多聞寺前遺跡調査団 1983 『多聞寺前遺跡II』
- 東京都埋蔵文化財センター 2004 『武蔵国分寺跡関連遺跡(武蔵台西地区)』東京都埋蔵文化財センター調査報告第149集
- 東京都埋蔵文化財センター 2010 『武蔵国分寺跡関連遺跡・武蔵台遺跡』東京都埋蔵文化財センター調査報告第239集
- 都営川越道住宅遺跡調査団 1999 『武蔵台東遺跡』
- 都立府中病院内遺跡調査団 1984 『武蔵台遺跡I』
- 長泉町教育委員会 1986 『中尾・イラウネ・野台』
- 長泉町教育委員会 1994 『平畦遺跡・陣場上B遺跡』
- 沼津市教育委員会 1982 『一般国道246号裾野バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書』沼津市文化財調査報告書第27集
- 沼津市教育委員会 1989a 『土手上・中見代第II・第III発掘調査報告書』沼津市文化財調査報告書第43集
- 沼津市教育委員会 1989b 『中見代第I遺跡発掘調査報告書』沼津市文化財調査報告第45集
- 沼津市教育委員会 1989c 『清水柳北遺跡発掘調査報告書その2』沼津市文化財調査報告書第48集
- 沼津市教育委員会 1992 『尾上イラウネ遺跡発掘調査報告書II』沼津市文化財調査報告書第53集
- 沼津市教育委員会 1999 『西洞遺跡(b区-1)発掘調査報告書』沼津市文化財調査報告書第69集
- 沼津市史編さん委員会 2002 『沼津市史 資料編 考古』
- 練馬区遺跡調査会 1987 『葛原遺跡B地点調査報告書』
- 三島市教育委員会 1994 『五輪・觀音洞・元山中・陰洞遺跡I』
- 三島市教育委員会 1998 『中村分遺跡 天台B遺跡 台崎C遺跡』
- 三島市教育委員会 2002 『三鷹市埋蔵文化財発掘調査報告書VII』
- 三鷹市遺跡調査会 2004 『天文台構内遺跡IV』

Lithic Industry in the Early Part of Late Upper Paleolithic around Mt. Ashitaka and Hakone

: Its Chronological Division and Dating

Yuuki NAKAMURA

Summary: Using an increasing number of data newly brought from excavation sites at the foot of Mt. Ashitaka-Hakone, this paper describes chronological sequences of the above area's lithic industries belonging to the early part of late Upper Paleolithic (which corresponds to the period between the AT tephra fall and Sunagawa Phase of Kanto region).

Firstly the industries excavated in the Black Band I, Scoria Layer I, Black Band 0 and the Lower Yasumiba Loam of the said region are subdivided into seven groups. Then the correspondence with the chronological sequence and the radiocarbon age of South Kanto region are considered. The industries from Black Band I and the Scoria Layer I are chronologically parallel with the Layer V lower and Upper Phases of South Kanto region, c.30, 000-28,000 cal BP, and those from the Black Band 0 and Lower Yasumiba Loam are parallel with the Layer IV Lower and Middle Phases, their age is older than 23,000 cal BP. My results suggest that the phases of the Black Band 0 and the Lower Yasumida Loam can be longer than expected archaeological chronology.

Key words: foot hills of Mt.Ashitaka and Hakone, early part of late Upper Paleolithic, BlackBand I, Scoria Layer I, Black Band 0, Lower Yasumiba Loam, Layer V and Lower Layer IV Phase, radiocarbon age